

一一〇

寂日房御書

弘安二年九月

五十八歳御作

902P

与寂日房日家 於身延

是これまで御おをとづ音れかたかたじけなく候、夫それ人身にんしんを受づくる事は稀まれ

なるなり、已すでにまれなる人身にんしんを受づけたり又あひがたきはぶつぼう仏法、是これも又

あへり、同じぶつぼう仏法の中にも法華經の題目にあひたてまつる結句題目の

行者ぎやうとなれり、まことにまことに過去十万億の諸しよ仏ぶつを供養くやうする者

なり。

日蓮にちれんは日本第一にほんだいいちの法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなり、すでに勸持品かんじほんの二十行にじゅうぎやうの偈げ

の文ぶんは日本国にほんこくの中には日蓮にちれん一人ひとりよめり、八十万億那由他ないうたの菩薩ぼさつは口

には宣のべたれども修行しゆぎやうしたる人ひと・二人ふたりもなし、かかる不思議ふしぎの日蓮にちれんをう

み出いだせし父母ふぼは日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうの中には大果報かほうの人ひとなり、父母ふぼ

となり其その子となるも必ず宿習しゆくじゅうなり、若もし日蓮にちれんが法華經ほけきょう・釈迦しゃか

によらい おんづかい

如来の御使おんづかいならば父母ふぼあに其そのの故ゆえなからんや、例せば妙莊嚴王みょうじょうごんのう・

じょうとくふじん

淨徳夫人・淨蔵・淨眼じょうがんの如ごとし、釈迦しゃか・多宝たほうの二仏にちれん・日蓮にちれんが父母ふぼと變じ

たま

給たまうか、然しからずんば八十萬億ぼさつの菩薩ぼさつの生れかわり給たまうか、又

じょうぎじょうぼさつ

上行菩薩等の四菩薩ぼさつの中の垂迹すいじやくか不思議ふしぎに覺おほえ候いつさい、一切いっさいの物にわた

りて名の大切なるなり、さてこそ天台大師てんだいだいし・五重玄義ごじゅうげんぎの初めに名玄義げんぎ

と釈しゃくし給たまへ。

にちれん 名乗

日蓮にちれんとななる事じげぶつじょう自解じげ仏乘ぶつじょうとも云いいつべし、かやう斯様に申せば利口にちがげに

きこ

聞きこえたれども道理どうりのさすところ指さもやあらん、經いに云いく「日月にちがの

こつみよう

光明こつみようの能よく諸もろもろの幽冥ゆうみようを除よくが如ごとく斯この人せけん・世間せけんに行よじて能よく衆生しゆじよう

の闇を滅たす」と此の文の心よくよく案たまじさせ給しにんぎようへ斯人行世間の五の

もんじ じやうぎやうぼなつ まほう はじめ しゅつげん な む みやうほうれんげきやう
文字は上行菩薩 末法の始の五百年に出現して南無妙法蓮華經の
ごじ じやうみやう 指 むみやうほんのつ 照
五字の光明をさしだして無明煩惱の闇をてらすべしと云う事なり、
にぢれん じやうぎやうぼなつ おんつかい にほんこく いっさいしゅじやう ほかきやう 受
日蓮は此の上行菩薩の御使として日本国の一切衆生に法華經をう
けたもてと勧めしは是なり、此の山にしてもをこたらず候なり、今の
きやうもん つぎしも 持 すす これ 急
經文の次下に説いて云く「我が滅度の後に於て応に此の經を受持すべ
こ ぶつじやう おい けつじやう うたが あ
し是の人・仏道に於て決定して疑い有ること無けん」と云云、かかる
でし だんな ひとびと しゆくえん にぢれん
者の弟子・檀那とならん人人は宿縁ふかしと云うて日蓮と同じく
ほかきやう ひろ ほけきやう きやうじやうや
法華經を弘むべきなり、法華經の行者といはれぬる事はや不祥なり
まぬかれがたき身なり、彼のはんかいちやうりやうまさかどすみとも
云 惜 ゆえ 恥 良 將 門 純 友
といはれたる者は名ををしむ故にはちを思ふ故に・ついに臆したるこ
とはなし、同じはぢなれども今生のはぢは・もののかずならず・ただ

ごしょう

恥

後生のはちこそ大切なれ、獄卒ごくそつ・奪衣だつえ・婆ば・けんねおうそうずがわ・端たん

衣装いさう

剥はく

おぼしめ

ほけきよう

どうじよう

たま

ほけきよう

いしうをはがん時を思食して法華經の道場へまいり給うべし、法華經

ごしょう

恥

は後生のはちをかくす衣なり、經に云く「裸者の衣を得たるが如し」

云云。

ごほんそん

此の御本尊こそ冥途のいしやうなれよくよく信じ給うべし、をとこ

膚

ごほんそん

衣装

寒

憐

親

のはだをかくさざる女あるべしや、子のさむさをあわれまざるをやあ

るべしや、釈迦しやくか・仏ぶつ・法華經ほけきようはめとをやとの如くましまし候ぞ、日蓮にちれんを

扶たす

たま

こんじよう

はじ

たま

ごしょう

にちれんおんみ

たすけ給う事・今生の恥をかくし給う人なり後生は又日蓮御身の

はち恥

もつ

ごしょう

はじ

たま

ごしょう

にちれんおんみ

はちをかくし申すべし、昨日は人の上・今日は我が身の上なり、花さけ

ば恥

もつ

ごしょう

はじ

たま

ごしょう

にちれんおんみ

ば恥・このみなり・よめ嫁のしつとめになる事候ぞ、信心しんじんをこたらずして南無なむ

み恥

もつ

ごしょう

はじ

たま

ごしょう

にちれんおんみ

妙法蓮華經と唱え給うべし、度度の御音信申しつくしがたく候ぞ、

妙法蓮華經と唱え給うべし、度度の御音信申しつくしがたく候ぞ、

此の事寂日房くわしくかたり給へ
じやくにちぼう 詳語 たま

九月十六日

にちれんかおつ
日蓮花押